様式第２号

平成２７年度　　地 域 貢 献 特 別 研 究 費 実 績 報 告 書

平成２８年３月２３日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td>認定看護師教育センター</td><td>職 名</td><td>特任助教</td><td>氏 名</td><td>杉島　訓子</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="6">客観的臨床能力試験（OSCE）システムを活用した看護専門職の能力開発</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td>所属・職</td><td>専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>杉島　訓子</td><td>地域共同研究機構
認定看護師教育センター
特任助教</td><td>慢性疾患看護
糖尿病看護</td><td colspan="2">研究企画、OSCEセッションの内容検討、準備、実施・評価</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>住吉　和子

佐田　佳子

浅井　美穂</td><td>保健福祉学部　看護学科
教授

地域共同研究機構
認定看護師教育センター
特任准教授
保健福祉学部　看護学科
助教</td><td>成人看護学
慢性疾患看護

慢性疾患看護
糖尿病看護

成人看護学・
基礎看護学</td><td colspan="2">研究アドバイザー、OSCEセッションの内容検討、評価アドバイザー

OSCEセッションの内容検討、準備、実施・評価

データ分析・OSCEセッションの内容の検討</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要
（地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）</td><td colspan="6">【目的】認定看護師は特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて水準の高い看護実践を行う事を求められている。糖尿病看護分野では、対象を生活者として捉えるために、看護面談技術・コミュニケーションスキルのような高度な臨床スキルが必要とされている。これらの臨床能力は、臨床経験、講義などの座学や演習のみでは、習得が難しく、筆記試験や面接試験では、評価に限界があり、医学教育や看護教育の課題の一つとなっている。面接技法に関する演習を行い、臨床能力開発の効果を検討する。

１．　コミュニケーション演習
1）　体験学習を取り入れたコミュニケーション演習
　アイマスクでのロービジョン体験、シュミレーションゲーム、ワールドカフェ方式でのグループディスカッションを行い、自己理解、他者理解を行った。体験学習を通して演習の意義を自由記載で抽出した。その抽出したキーワードをカテゴリー化した結果、「糖尿病看護認定看護師の役割理解」「自己の面談技法に関する課題」「自己表現しやすい環境」「入学の意義の再確認」「仲間意識」が抽出できた。

2）　「対人関係」の受講
　認定看護師教育課程　共通科目「対人関係」の講義を6月中旬に15コマ受講した。安藤美華代講師より、サクセスフルセルフの教材を基に自己理解、他者理解の講義を受けた。講義内には体験学習も多く含まれた。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要 （地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）	3）　客観的臨床能力試験（OSCE）の実施 　特定非営利活動法人　響き合いネットワーク・岡山SP研究会より2名の模擬患者を招き、10分間の模擬面談を行った。面談の様子はビデオカメラで撮り、希望者には自己の面談の様子をUSBメモリーに記録し、振り返りを行った。直後の感想と学びを5点満点で評価させた。自己の気付き：4.76、ありのままの自分を知るきっかけ：4.37と高得点であった。一方、OSCEを通してやる気になった：3.42、自信がついた：2.58、悲しい気持ちになった：2.74と低値を示した。OSCEの臨床への活用については、臨床能力の不足を感じた：4.74、課題の明確化：4.42、臨床に活用できる：4.68、自己成長に繋がる：4.56、意欲の高まり：4.11と高得点であった。負担感については3.32と著明な負担感は感じていないが、自由記載では「緊張した」「監視されている」「いつもの自分が出せない」等の意見が抽出され、一定の負担感を感じている事が示唆された。 4）　専門科目「面談技法」の受講 　中山紀子講師より看護における面談技法を4コマ受講した。実際にペアワークを行い、面談時の基本姿勢を学び、講師による面談の実際を受講する事でモデリング効果を狙った授業内容であった。 ２．臨地実習 　平成27年11月2日～12月4日の5週間、臨地実習が行われた。認定看護師である実習指導者の面談場面を見学する機会を得、実際に患者に対し面談技法を基盤とする看護支援が行われた。実習を通して、面談場面を再構成し、患者理解を深めた者とそうでない者がいた。再構成を行う事で患者理解や自己の面談技法を振り返り、経験学習ができた学生もいた一方で、学内演習を活かすことなく、十分な患者理解ができず、適切な看護支援を展開できない学生も居り、個人差が見られた。 ３．実習後の全体の振り返り 　実習後、教育課程全体を通して「面接技法の習得におけるOSCEの効果」を自由記載で評価した。「自己の課題が明確になり、継続学習のきっかけになった」などの意見がある中で、「評価される負担」「うまくやらなければならないという気持ちが強かった」「OSCEは特殊な環境でのコミュニケーションであり、臨床に生かす事は難しい」との意見もあった。糖尿病看護認定看護師として必要な面談スキルである、「生活者として対象を捉える」事に対しては、OSCEを含む演習では自己の課題を見出す事は出来なかったとの意見が大半を占めた。一方、臨地実習において指導者の面談場面を見学し、自己の面談スキルを再構成した事で経験学習できたとの意見があった。 【考察】 　臨床経験のある看護師教育におけるコミュニケーションスキルの向上に関するOSCEの意義は、「自己の課題に気づく事」には一定の効果があるが、専門的な面談スキルの向上には至らなかった。その背景に模擬患者である事の限界と短時間の面談で生活史を聴く事が困難である事が考えられる。専門性の高いスキルの向上には、知識、技術の習得だけでなく、モデリングやフィードバックによる訓練が有効である事が示唆される。SST（ソーシャルスキルトレーニング）などを活用した、継続した研修が有効ではないかと考えられた。

成果資料目録	OSCE終了後アンケート調査概要　1部